

「新規感染者ゼロ」をめざして

公益財団法人エイズ予防財団 理事長

木村 哲

感染症関連では西アフリカにおけるエボラ出血熱の大流行や、中東のラクダを介したMERS (Middle East Respiratory Syndrome Coronavirus) の流行、日本では代々木公園を舞台としたデング熱の国内感染アウトブレイク、西日本におけるマダニによるSFTS (Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome) の多発、大流行が危惧される新型インフルエンザに対する備えなど、話題に事欠きません。しかし、HIV感染症・エイズに関しては不本意ながら、社会の関心がすっかり薄れ、話題に上ることも少ない状況が続いており、それに乗じてHIV感染症・エイズがじわりと増えています。

2014年5月に2013年1年間の新規HIV感染者数などの確定値が公表されました。それによると、新規感染者数は1,106名(過去2番目)、エイズ発症でHIV感染と判明した人は484名(過去最多)、両者の合計1,590名(過去最多)という状況です。

「AIDS IS NOT OVER ～まだ終わっていない～」

これは今年12月1日の「世界エイズデー」に向けて厚労省と公益財団法人エイズ予防財団とで策定したキャンペーンテーマです。世の中には日本では流行は収まっていると思っておられる方が多いようですが、上の数字が示すようにエイズは「まだ終わっていない」どころか、「増加傾向」が続いています。

HIV感染症に対しては優れた治療薬が開発され、それを服用していれば免疫力は回復し、エイズを発症しなくなりました。ところがお気づきのとおり、エイズ発症でHIV感染と判明した人が全体の30%を占めており、この状態が続いています。防げるはずのエイズ発症が防げない理由は、HIVに感染していても検査を受け



1967年東京大学医学部卒業。1973年ペンシルバニア大学医学部生化学教室留学。1980年国立がんセンター研究所室長に就任、内科併任。1986年東京大学医科学研究所附属病院感染免疫内科助教授、1995年社会保険中央総合病院副院長、1996年東京大学大学院医学系研究科感染制御学教授、同内科学第一講座教授併任、1998年診療科再編により感染症内科教授(併任)に変更。1999年～2001年3月まで東京大学医学部付属病院副院長。その間、国立国際医療センターACC長を併任。2003年東京大学名誉教授となり、2008年エイズ予防財団理事長ならびに友愛福祉財団理事長に就任。東京医療保健大学学長。

る人が少ないためです。

HIV感染症は感染のごく初期を除き、エイズを発症するまで長期にわたり無症状ですので、検査を受けなければ感染しているかどうかわかりません。全国の保健所や自治体で行われている検査の件数は2008年までは年々増加し、年間約17万件を超えました。しかし、その後は13万件程度で低迷し、回復の兆しがありません。この病気に対する社会の差別・偏見の目が検査を受けづらくしているのも事実です。

感染の予防が第一に重要ですが、それと共に早期検査・早期治療が大切です。感染を知り、抗HIV療法を継続することは、本人の健康回復・維持に必須であることはもちろん、治療を受けているとパートナーへのHIV伝播を96%減少させることも報告され、Treatment as Preventionとして注目されています。

公益財団法人エイズ予防財団は厚労省の助けをいただきながら、感染予防啓発活動や検査受検に向けたキャンペーン・AC広告などを行い、基礎研究・臨床研究の支援、NGOの支援と協働、差別・偏見のない社会実現に向けた研修会・公開講座などを行っています。「新規感染者ゼロ」をめざして頑張っておりますので、皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。